

犬は4本の足で歩く：ニールセン教授の教え

加藤 邦彦*

大学を卒業して15年以上たったが、最近になって大学で学んだ知識や経験がようやく生かされてきたと感ずることがある。過去に学んだことがいつどこでどのように役に立つことになるのか、全く予想できないものである。大学の時の貴重な思い出の一つに、ニールセン (Donald R. Nielsen) 教授の教えがある。土壌中の溶質移動に関する研究で著名なニールセン教授は、その元から多くの優れた研究者が育ったことでも有名な先生である。その教授が日本を訪問されたときの講演とその後の質疑や宴席で語られたいくつかの言葉が強く心に留まっている。この場を借りて、ニールセン教授の教えの一端について私なりの解釈を交えてご紹介したい。ずいぶん昔のことであり、正確に聞き取れていたかも知定かではなく、解釈や聞き取りに曖昧さや勘違いが含まれていることも危惧されるが、何とぞご容赦願いたい。

強く印象に残っているニールセン教授の教えは以下の4つである。

① 「1匹の犬は4本の足を使って歩く。」

犬の4本の足とは、例えば、文献調査、室内実験、野外調査、データ解析とまとめである。犬が4本の足を使って歩くのは当然のことで、このうちの足が欠けてもうまく歩けない。室内実験だけとか野外調査だけとかいう偏った歩き方は駄目である。犬(研究者)によってタイミングは異なるだろうが、4本の足を使ってバランス良く歩く(研究する)ことが大切だという教えである。なかなかうまくできないが、肝に銘じたい教えである。

② 「農家は事実をよく知っている。科学的に説明する方法を知らなかったとしても。」

土壌科学の研究成果の主要な受益者は農家である。個々の農家に対して我々はどうに研究成果を説明すべきかと質問されたときに、教授は車の運転に例えて、「押すべきか引くべきかのように単純に教えるべき」と即答された。講演の後、私は疑問に思っ、農家は事実をよく知っているのではないかと教授に直接聞いてみた。その時の教授の答えが、「その通りだ。農家は事実をよく知っている。私の父も農家だった。父は何でも知っていた。科学的に説明する方法は知らないかもしれないが農家は事実を知っている。絶対に。」という力を込めた言葉

だった。私の母も農家のお出で、学識は無いが自ら体験した農業の現実をよく知っていると感じていたので素直に理解できた。事実を知っている農家の知識と経験から学ぶのも我々の勤めと思う。農家は分野を限定せずに多くの知識と経験を持っている。農家に限らず、現場の事実を知っている方々から、頭を下げ素直に学びたい。

③ 「論文を読むときは書かれていないことを読め！」

書かれていることを読むのは当たり前のこと。問題は書かれていないことにある。何故書かないのか。自分で書く立場になると判る。不明瞭なこと、次に行なうこと、抜け落ちていること、等々、意識的であるか否かにかかわらず書かないことにこそ次に取り組むべき重要な研究テーマが隠されていることが多い。それこそが我々が次に取り組むべき課題であるとの教えである。なかなか出来ないが、そういう論文の読み方をしたい。

④ 「無理そうなテーマに挑む犬の手綱を引くな」

失敗する恐れの高い研究テーマに挑戦したいという学生を先生はどのように指導するのか訪ねたときの答えである。先生曰く「本人がやりたいといったテーマについて、これまで一度も止めたことはない。これまで2人、3人と同じテーマに挑戦して失敗した同じテーマであったとしても決して止めない。犬の手綱を引っ張らないように必死になって一緒に走るだけだ。」

この言葉に教授の信念を感じた。自分の走りたい方向を自分ではっきりと意識できるのも研究者の資質の一つだろう。それが失敗に終わったとしても、それは本人の責任である。研究の失敗の責任までとろうとするあまり、本人の自由まで奪ってしまう指導者も多い。善し悪しを言える話ではないが、ニールセン先生の元から多くの優秀な研究者が育っていったのは、教授のこのような姿勢に依るものではないかと思う。

以上が心に残っているニールセン教授の4つの教えである。目標としたい教えであるが、実現できていないものばかりである。一匹の犬として、自由に歩けるようになるのはいつの日だろうか。一生が終わるまでには、かっこよく歩ける経験がしたい。

受稿年月日：2006年10月10日

受理年月日：2006年10月10日